投稿

小地域における高齢者の社会参加活動への参加促進要因についての探索的研究

－高齢者の社会参加活動の活発な地区における要因分析を通して－

蘇（ソ）　暁娜（ギョウナ）*

目的　趣味や生きがい活動など高齢者の社会参加活動が活発的に行われている島根県松江市淞北台地区に着目し，参加する当事者である高齢者の社会参加活動の特徴を明らかにするとともに，社会参加活動と地域の環境的要因に対する認識から，小地域における高齢者の社会参加活動を促進する要因を明らかにすることを目的とした。

方法　先行研究などから高齢者の社会参加活動を促進する要因について30項目を設定し，当該地区の65歳以上の257名を分析対象者として2020年４月25日から５月16日までアンケート調査を実施し，探索的因子分析を行った。

結果　回答者の年代からみると，社会参加活動に参加している方は，前期高齢者より75歳以上の後期高齢者が多かった。社会参加活動の参加割合は，趣味関係では前期高齢者25.0%，後期高齢者75.0%，スポーツ関係では前期高齢者26.6%，後期高齢者73.4%，ボランティアでは前期高齢者27.7%，後期高齢者72.3%，老人クラブでは前期高齢者16.0%，後期高齢者84.0%，町内会・自治会では前期高齢者33.1%，後期高齢者66.9%，住民同士の親睦交流会では前期高齢者26.8%，後期高齢者73.2%であった。また，趣味関係のグループでは，「週１回程度」および「月１～２回」の高頻度の参加者が合計78.4%であり，スポーツ関係のグループでは，「週１回程度」および「月１～２回」の高頻度の参加者が合計65.6%，いずれも「年数回程度」の低頻度の参加者（趣味21.6%，スポーツ関係34.4%）より多く，他の社会参加活動より参加頻度が高かった。社会参加活動についての探索的因子分析を行った結果，小地域における高齢者の社会参加活動への参加促進要因として，「地域住民との協力による地域とのつながり」「地域活動への参加のしやすさ」「地域貢献への主体的な取り組み」「満足感や自己効力感の獲得」の４つの因子が抽出された。

結論　小地域において高齢者の社会参加活動を活性化するためには，第一に，高齢者自身の趣味や嗜好を反映した参加を促進する環境の整備を行うこと，第二に，参加者同士の緩やかな関係性を尊重しながら，参加する当事者である高齢者の主体性を最大限に活かすことが重要であること，第三に，社会参加活動を促進するためには，高齢者自ら認めた成果が実感できるようなプログラムの創出が求められる。

キーワード　小地域，高齢者，社会参加活動，参加促進要因，因子分析

＊法政大学大学院人間社会研究科人間福祉専攻

Ⅰ はじめに

超高齢社会となった日本では，高齢者の社会的孤立を防止し，その居住地域において社会参加活動を促進するために，いかに効果的な取り組みを実施し高齢者の社会参加を促進するのかが重要な課題となっている。

地域における高齢者の趣味，ボランティア，町内会・自治会活動などの社会参加活動の促進要因に関する先行研究では，橋本ら[1]が開発した社会活動性指標を用い，基本属性における社会参加活動を促進する要因として，年齢が低い，学歴が高い，配偶者がいる，経済的暮らし向きにゆとりがある，居住年数が長いなどが関連していることを報告している[2)-7)]。また，身体に関する促進要因として，健康度の自己評価が高い，活動能力が高い，外出時の体のつらさが無い[2)-5)]，心理に関する促進要因として，自己効力感が高い，他者・地域貢献意識が高い，地域社会への態度得点が高いなどが報告されている[3)-7)]。また，地域の環境的な側面に関する促進要因として，親しい友人や仲間の数が多い，外出や活動への誘いがあり，中年期の地域との関わり，技術・知識・資格，活動情報の認知，近隣の人間関係量や信頼できる人間関係量が多いことや社会関係資本の質が良い等が報告されている[3)-9)]。

これらの先行研究[2)-9)]は，社会参加活動が活発な高齢者の特徴が示されているが，いずれも高齢者個人の要因に焦点を当てた研究である。また地域的には，都市部など広域な範囲を分析対象としているものがほとんどである。しかし，高齢者の社会参加活動を促進するためには，高齢者が有する個人的な要因だけでとらえるのではなく，高齢者にとっての暮らしの場である小地域における活動の参加しやすさや住民相互の関係性など，地域における参加を促進する環境的要因を明らかにすることが求められると考える。

そこで本研究では，超高齢化が進んでいるものの，高齢者による趣味や生きがい活動などが活発的に行われている島根県松江市淞北台地区に着目し調査対象とした。そして，当該地区における参加当事者である高齢者の社会参加活動の特徴を明らかにするとともに，社会参加活動と地域の人間関係の質などに対する認識について探索的因子分析によって，高齢者の社会参加活動を促進する要因を明らかにすることを目的とした。

Ⅱ 方　　法

（１） 調査対象地域

淞北台地区は，島根県松江市の中心市街地の北部に位置する人口1,011人（2020年３月現在，449世帯）の住宅団地である。当地域は住宅供給公社が開発し1967年より勤労者住宅として分譲を開始した。今現在，淞北台は戸建て住宅，県営住宅，県警住宅，ヒルズガーデンの世帯を含め，１つの自治会として活動している。こういったきっかけは，1973年７月，松江市大渇水の危機を住民一致団結で乗り切ったことにある。当初，他地域からの転入者によって構成されていたが，現在住民の多くは退職したものの継続して淞北台地区に居住している[10)]。

2020年３月現在，淞北台地区の65歳以上の高齢者人口は396人，高齢化率は39.2％であり，全国の高齢化率28.7％より10.5ポイント高くなっている。また75歳以上の後期高齢者は高齢者全体の68.9％を占め，全国高齢者に占める後期高齢者の割合51.5％より17.4ポイントも高くなっている。一方，淞北台地区の要介護認定率は18.7％であり，全国平均並みである[10)11)]。

2020年３月現在，19種類の趣味教室・同好会活動が，住民たちが自発的に提案し活動している。記録資料によると，各種の活動に参加する高齢者は，年間推計延べ約10,000人となっており，１人当たり換算で年間約20回の参加となっている。さらに男性高齢者や後期高齢者が活発に参加していることが，他地区と異なる淞北台地区の社会参加活動の特徴となっている。

以上のように，松江市淞北台地区は，その高齢者の社会参加活動の実績から小地域における

高齢者の社会参加活動が活発な地区として，その促進要因を探究するのにふさわしい地域と考え本研究の対象地域とした。

（２） 調査方法と対象

2020年４月25日から５月16日までに，淞北台地区自治会と協力して実施したアンケート調査のうち，65歳以上を分析対象とした。

（３） 調査項目

１） 基本属性

基本属性として，性別，年齢，家族構成，居住年数，経済的な暮らし向き，要介護度，主観的健康状態などを尋ねた。

２） 社会参加活動への参加頻度

趣味関係のグループ，スポーツ関係のグループ，ボランティアのグループ，老人クラブ，町内会・自治会，住民同士の親睦交流会の６種類の活動への参加頻度を尋ねた。

３） 小地域における高齢者の社会参加活動への参加促進要因

調査項目の作成にあたっては，まず高齢者の社会参加活動の促進要因に関する先行研究の知見[10)12)-14)]を参考にして項目を検討した。あわせて，淞北台地区に在住している65歳以上，積極的に社会参加活動をしている高齢者に対し，継続的に社会参加活動をしている要因について半構造化インタビュー調査を実施し，その結果を反映して項目の案を作成した。質問内容の妥当性を検討するために，高齢者福祉分野の２名の研究者にエキスパート・レビューを依頼し，30項目を設定した。回答は「４とてもそう思う」～「１とてもそう思わない」の４件法とした。

（４） 分析方法

まず，本地区における高齢者の基本属性と各質問項目の記述統計量を算出し，回答の度数分布から天井・フロア効果がないことを確認する。そして高齢者の地域活動への参加認識や地域活動を通して築かれた人間関係などの地域特性に対する認識を明らかにするために，探索的因子分析（主因子法，プロマックス回転）を行う。また，抽出した因子の内的一貫性を確認するためにクロンバックのα係数を算出する。分析はIBM SPSS Statistics Ver.25.0を用い，統計学的有意水準は５％とした。

（５） 倫理的配慮

調査は無記名で，調査の趣旨，調査への協力は自由意志に基づくこと，調査の結果は学会や論文などで統計処理をして公開し，個人が特定されることはないこと，協力しないことによる不利益は生じないことなどを記入した調査依頼文を調査票とともに配付した。質問紙への回答をもって研究の同意が得られたものとした。淞北台自治会に社会参加活動への新型コロナ感染症の影響について尋ねたところ，調査時点においてコロナ感染症が島根県まで拡大していないため，高齢者の社会参加活動は休止することなく継続していたと確認した。

なお，本研究の一連の手続きについて，2019年12月に実施された法政大学大学院人間社会研究科研究倫理審査委

表１　調査対象者の基本属性（ｎ＝257）

	人数（%）		人数（%）
性別		教育年数	
男性	108(42.0)	９年以下	21(8.2)
女性	145(56.4)	10年以上12年以下	122(47.5)
答えたくない	－(－)	13年以上	111(43.2)
年齢		答えたくない	2(0.8)
65～69歳	38(14.8)	経済的暮らし向き	
70～74	43(16.7)	全く心配ない	24(9.3)
75～79	65(25.3)	それほど心配ない	113(44.0)
80～84	59(23.0)	多少心配	92(35.8)
85歳以上	52(20.2)	非常に心配	23(8.9)
家族構成		要介護度	
一人暮らし	53(20.6)	要支援１	17(6.6)
配偶者と２人暮らし	125(48.6)	要支援２	5(1.9)
２世代同居	56(21.8)	要介護１	1(0.4)
３世代同居	7(2.7)	要介護２	3(1.2)
その他	16(6.2)	要介護３	1(0.4)
居住年数		受けていない	204(79.4)
９年以下	5(1.9)	主観的健康感	
10～29年	29(11.3)	とても良い	20(7.8)
30～39	52(20.2)	まあまあ良い	174(67.7)
40年以上	171(66.5)	あまりよくない	51(19.8)
居住形態		よくない	8(3.1)
一戸建て	229(89.1)		
県営住宅	28(10.9)		

注　各項目で欠損値がある者は除外しているため，ｎ＝257とならない場合がある。

員会において倫理上の問題がないことが認められている（承認年月日：2019年12月23日。承認番号：法政大学大学院190201_2）。

Ⅲ 結　　果

質問紙は，配布世帯数446世帯計892部から，482部が回収された。このうち65歳以上の257名を分析対象とした。これは65歳以上人口の64.9％である。

（１） 調査対象者の基本属性（表１）

調査対象者の性別は，男性より女性の方がやや多くなっている。年齢は，65～74歳の前期高齢者が約３割，75歳以上の後期高齢者が７割近くとなっており，本調査の対象者の多くが，75歳以上の後期高齢者となっている。家族構成は，配偶者との２人暮らしが約５割であり，２世代同居と３世代同居が約４分の１となっている。また，一人暮らしが約２割となっている。居住年数は，40年以上が７割弱，30～39年が約２割とかなり長期にこの地域に居住している人が大半となっている。経済的暮らし向きは，「それほど心配ない」が５割弱，「多少心配」が約３分の１強，「全く心配ない」が１割弱であり，主観的に経済的余裕があるとする者が多い傾向にあることが示されている。要介護認定を受けていない方が８割弱，要支援１，２と要介護１，２，３の方が約１割となっている。

（２） 社会参加活動への参加状況（表２）

回答者の年代をみると，活動への参加率は，前期高齢者より後期高齢者の方が高く，各活動参加者の１位，２位を占めている。特に趣味関係のグループとスポーツ関係のグループは「週１回程度」および「月１～２回」の高頻度の参加者が，「年数回程度」の低頻度の参加者より多くなっている。他の活動への参加者数も多いが，参加頻度は「年数回程度」にとどまっている。地域の高齢化の進展が社会参加活動に悪影響を与えると考えがちであるが，本調査の結果からは，淞北台地区において，前期高齢者より後期高齢者の方が，社会参加活動が活発であることが示されている。

表２　社会参加活動の参加状況（n＝257）

（単位　％）

組織の種類	参加頻度	合計	年齢				
			65～69歳	70～74	75～79	80～84	85歳以上
趣味関係のグループ	合計	100.0	10.2	14.8	23.9	26.1	25.0
	週１回程度	30.7	1.1	5.7	6.8	11.4	5.7
	月１～２回	47.7	5.7	3.4	9.1	12.5	17.0
	年数回程度	21.6	3.4	5.7	8.0	2.3	2.3
スポーツ関係のグループ	合計	100.0	14.1	12.5	31.3	28.1	14.1
	週１回程度	42.2	6.3	4.7	14.1	15.6	1.6
	月１～２回	23.4	1.6	3.1	9.4	4.7	4.7
	年数回程度	34.4	6.3	4.7	7.8	7.8	7.8
ボランティアのグループ	合計	100.0	14.9	12.8	23.4	29.8	19.1
	週１回程度	10.6	4.3	2.1	0.0	0.0	4.3
	月１～２回	34.0	8.5	2.1	10.6	10.6	2.1
	年数回程度	55.3	2.1	8.5	12.8	19.1	12.8
老人クラブ	合計	100.0	6.0	10.0	22.0	28.0	34.0
	週１回程度	2.0	0.0	0.0	0.0	0.0	2.0
	月１～２回	30.0	2.0	0.0	12.0	6.0	10.0
	年数回程度	68.0	4.0	10.0	10.0	22.0	22.0
町内会・自治会	合計	100.0	16.1	17.0	24.1	22.3	20.5
	週１回程度	2.7	0.0	0.0	0.9	1.8	0.0
	月１～２回	17.9	2.7	3.6	2.7	7.1	1.8
	年数回程度	79.5	13.4	13.4	20.5	13.4	18.8
住民同士の親睦交流会	合計	100.0	14.4	12.4	26.8	27.8	18.6
	週１回程度	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
	月１～２回	17.5	4.1	0.0	3.1	6.2	4.1
	年数回程度	82.5	10.3	12.4	23.7	21.6	14.4

注　1）網掛けは，年齢階層別に各活動参加者の１位，２位を示している。
　　2）破線は，「週１回程度」および「月１～２回」の高頻度の参加者の割合を示している。

（３） 小地域における高齢者の社会参加活動への参加促進要因についての探索的因子分析（表３，表４）

まず，全30項目について得点分布を確認したところ，ある選択肢に対象者の75％以上が集中しているような項目がないことを確認した。

その上で30項目を主因子法によって因子分析し，因子数をみると，固有値は，12.78→1.94→

1.62→1.48→1.15と変化し，因子間の前後の差を計算してみると，第１因子と第２因子との差は10.84，第２因子と第３因子との差は0.32，第３因子と第４因子の間は0.14，第４因子と第５因子の間は0.33となっている。

また，第１回目の因子分析の結果により，因子抽出後の共通性を確認したところ，すべての項目を以降の分析対象とした。30項目で４因子構造であると考えて，主因子法，プロマックス回転によって，第２回目の因子分析を行った。

２回目の因子分析の結果，因子負荷量が0.4以下となった項目，以下「安心して自分を素直に出せる場所がある」「地域の活発的な交流活動に誇りを感じている」「気の合った人と深く付き合うより，いろいろな人と広く交流している」「地域活動を活かした共同作業が行われている」「気が合わない方がいても悩まない」「転居してきた人を積極的に受け入れようと思っている」「やりたいことがあれば，周りを気にせずやった方がよい」を除外した。

さらに主因子法，プロマックス回転により３回目，４回目の因子分析を行った。因子負荷量が0.4以下となった項目「ご近所のほぼすべての人と面識がある」「地域で自分を頼りにしてくれる人がいる」を削除した。その結果，最終的に**表４**のとおり，計21項目から構成される４因子が抽出された。４つの下位要因のクロンバックのα係数は0.862，0.837，0.817，0.924であり，因子としての内的一貫性があると判断された。また，KMOの標本妥当性は0.933で，因子分析の標本妥当性は確保されていると判断した。因子による累積寄与率61.2％であった。

表３　高齢者の社会参加活動を促進する要因に関する30項目

番号	項目	平均値 ±標準偏差
1	地域に自分の趣味に合う活動がある	2.67±0.90
2	地域活動は会場が近く気軽に参加できる	2.95±0.90
3	地域活動を通し，自分は役に立っている	2.14±0.89
4	地域活動は制限なく自由に参加できる	2.85±0.92
5	地域活動を通し，親しい友人が増えている	2.34±0.94
6	地域活動は知り合いが多く，楽しく参加している	2.31±0.98
7	地域の集まりに活発に参加している	2.11±0.95
8	地域活動を活かした共同作業が行われている(草取り，溝掃除，夏祭りの準備等)	3.06±0.87
9	近所の人々とお互いに相談し，生活面で協力し合っている	2.40±0.88
10	気が合わない方がいても悩まない	2.66±0.86
11	転居してきた人を積極的に受け入れようと思っている	3.31±0.72
12	地域の活発的な交流活動に誇りを感じている	2.83±0.86
13	安心して自分を素直に出せる場所がある	2.29±0.85
14	地域で自分を頼りにしてくれる人がいる	2.17±0.85
15	何らかの形で，積極的に地域に役に立つことをしたい	2.54±0.86
16	近隣との付き合いを，お互いに深く干渉しないので，暮らしやすいと思っている	3.09±0.68
17	気の合った人と深く付き合うより，いろいろな人と広く交流している	2.53±0.79
18	やりたいことがあれば，周りを気にせずやったほうがよい	2.84±0.78
19	地域の一員として閉じこもりやすいメンバーに積極的に声をかけようと思っている	2.37±0.84
20	積極的に地域活動の立ち上げを提案しようと思っている	2.03±0.74
21	日常，健康維持のための活動をしている	2.56±0.90
22	地域活動を通して自分の強みを活かし，自己成長が感じられる	1.94±0.76
23	困った時は近所同士で助け合っている	2.67±0.80
24	地域活動を通し，地域住民同士の信頼関係が築けている	2.71±0.77
25	ご近所同士で地域活動について相談し合っている	2.26±0.80
26	地域の見守り活動が行われている	3.03±0.78
27	ご近所のほぼすべての人と面識がある	2.84±0.96
28	災害に見舞われても地域住民で協力し合って克服している	2.76±0.79
29	趣味活動等，自分に関心のある活動に主体的に参加している	2.32±0.99
30	自分が参加している活動は，コミュニティの活性化に寄与している	2.19±0.92

第１因子は，「困った時は近所同士で助け合っている」「地域活動を通し，地域住民同士の信頼関係が築けている」「近所の人々とお互いに相談し，生活面で協力し合っている」「ご近所同士で地域活動について相談し合っている」「近隣との付き合いを，お互いに深く干渉しないので暮らしやすいと思っている」「災害に見舞われても地域住民で協力し合って克服している」「地域の見守り活動が行われている」の７項目で構成され，地域における協力関係や住民相互の関係性を示しており，「地域住民との協力による地域とのつながり」と命名した。

第２因子は，３項目から構成され，「地域活動は制限なく自由に参加できる」「地域に自分の趣味に合う活動がある」「地域活動は会場が近く気軽に参加できる」など地域活動に参加する際の条件に関する要因を示しており，「地域

表４　小地域における高齢者の社会参加活動への参加促進要因についての探索的因子分析

	因子負荷量				α
	因子１	因子２	因子３	因子４	
第１因子：地域住民との協力による地域とのつながり					
23. 困った時は近所同士で助け合っている	0.832				
24. 地域活動を通し，地域住民同士の信頼関係が築けている	0.790				
９．近所の人々とお互いに相談し，生活面で協力し合っている	0.683				
25. ご近所同士で地域活動について相談し合っている	0.582				
16. 近隣との付き合いを，お互いに深く干渉しないので暮らしやすいと思っている	0.558				
28. 災害に見舞われても地域住民で協力し合って克服している	0.499				
26. 地域の見守り活動が行われている	0.439				α＝0.862
第２因子：地域活動への参加のしやすさ					
４．地域活動は制限なく自由に参加できる		0.766			
１．地域に自分の趣味に合う活動がある		0.594			
２．地域活動は会場が近く気軽に参加できる		0.485			α＝0.837
第３因子：地域貢献への主体的な取り組み					
20. 積極的に地域活動の立ち上げを提案しようと思っている			0.775		
19. 地域の一員として閉じこもりやすいメンバーに積極的に声をかけようと思っている			0.763		
15. 何らかの形で，積極的に地域に役に立つことをしたい			0.508		α＝0.817
第４因子：満足感や自己効力感の獲得					
６．地域活動は知り合いが多く，楽しく参加している				0.871	
７．地域の集まりに活発に参加している				0.775	
５．地域活動を通し，親しい友人が増えている				0.748	
３．地域活動を通し，自分は役に立っている				0.695	
29. 趣味活動等，自分に関心のある活動に主体的に参加している				0.676	
30. 自分が参加している活動は，コミュニティの活性化に寄与している				0.623	
21. 日常，健康維持のための活動をしている				0.546	
22. 地域活動を通して自分の強みを活かし，自己成長が感じられる				0.515	α＝0.924
因子相関行列　第１因子	1.000	0.496	0.562	0.647	
因子相関行列　第２因子		1.000	0.290	0.592	
因子相関行列　第３因子			1.000	0.645	
因子相関行列　第４因子				1.000	

注　全体のα係数　α＝0.948　累積寄与率：61.2%
　　因子抽出法：主因子法　　回転法：Kaiserの正規化を伴うプロマックス法

活動への参加のしやすさ」と命名した。

第３因子は，「積極的に地域活動の立ち上げを提案しようと思っている」「地域の一員として閉じこもりやすいメンバーに積極的に声をかけようと思っている」「何らかの形で，積極的に地域に役に立つことをしたい」の３項目で構成され，地域への貢献的な意識や態度を示しており，「地域貢献への主体的な取り組み」と命名した。

第４因子は，「地域活動は知り合いが多く，楽しく参加している」「地域の集まりに活発に参加している」「地域活動を通し，親しい友人が増えている」「地域活動を通し，自分は役に立っている」「趣味活動等，自分に関心のある活動に主体的に参加している」「自分が参加している活動は，コミュニティの活性化に寄与している」「日常，健康維持のための活動をしている」「地域活動を通して自分の強みを活かし，自己成長が感じられる」の８項目が構成され，地域活動を通して得た満足感や効果を示しており，「満足感や自己効力感の獲得」と命名した。

Ⅳ 考　　察

分析の結果，小地域における高齢者の社会参加活動を促進する要因として，「地域住民との協力による地域とのつながり」「地域活動への参加のしやすさ」「地域貢献への主体的な取り組み」「満足感や自己効力感の獲得」の４つの因子が抽出された。これらの結果について，因子ごとの内容を吟味し，先行研究と比較しながら因子間の関係性について考察していく。

（１） 第１因子「地域住民との協力による地域とのつながり」

金ら[3]，岡本ら[5][6]によると，地域社会への態度得点が高い者は，社会参加・奉仕活動に参加する傾向がみられると指摘する。これらについて，本研究も先行研究を支持する結果を得た。日常からの近所づきあいや地域活動を通して，困った時には支え合ったり地域の問題に取り組んだりしながら，良好な関係・つながりを築くことで，地域への帰属意識が形成されやすいと考えられる。この帰属意識は，地域の高齢化問題に対応する時の責任感やモチベーションになり，自ら居住する地域への積極的な行動につながり，社会参加活動を後押しする認識だと推察できる。このような地域への帰属意識が住民間で定着すると，近隣の人間関係や信頼できる人間関係[8]も広がり，より他の高齢者へ誘いやすくなると考えられる。

また，この地域への帰属意識の高さだけでなく，「近隣との付き合いを，お互いに深く干渉しないので暮らしやすいと思っている」もあげられており，住民同士の信頼や協力し合う地域のつながりが形成されている一方，必要以上に深く干渉しないという関係性に着目する必要があると考える。この点は，交流・協力といった濃密な関係性だけではなく，必要以上に干渉をしない「お互いに中間的な距離を保ち，いわば付かず離れず」といった「社交」[15]的な関係性が，社会参加活動の継続要因となると考える。プライバシーに関する意識が強くなった今日，お互いに必要以上に干渉しないような雰囲気で上手に付き合っていく関係性が浸透していくことが，高齢者の社会参加活動が長く継続できる要因になると考えられる。

（２） 第２因子「地域活動への参加のしやすさ」

「地域活動への参加のしやすさ」は，活動に取り組む際の条件だと認識されている。本研究の結果からは，社会参加活動は強制ではなく，高齢者個人のペースで自由に参加できるような雰囲気が推測できる。淞北台地区にて行われた聞き取り調査（2018年11月）では，「ここの集まりなんかは，そんな人を責めたりしない，失敗してもいいし，無理しなくていいです，無理をして，役員になろうか，会に入ろうか，気にならないときは外れていい」と語られている[10]。岡本ら[4]は，高齢者の社会参加活動における非活動要因として，失敗への不安をあげているが，本研究から，失敗のため周りから排除される心配がないことや同調圧力に縛られない環境が，参加し続けられる促進要因であることが示唆された。老人クラブのように，長く役員が固定化し，垂直的で閉鎖的な人間関係になってしまうと，新たな会員が参加する余地がなくなってしまうことにつながる。

「行政施設が対象とするのは目的の明確な利用者に限られ，実際に人々が求めている不定型な気楽に寄り集うところは用意できていない」[16]ことが多い中，本研究では，自分の趣味に合う活動をそろえていることの重要性が提示されている。また，現行の老人クラブでは，活動内容のマンネリ化により参加者が制限されやすくなり，徐々に参加者が減少してしまうと考える。この点からも，居住地域周辺における高齢者の社会参加活動が豊富であることが参加促進要因として示唆された。

また，松岡[17]によると，レクリエーション活動の場の提供として，高齢者同士が自由に楽しめる場への参加要因について，歩行が可能であっても長い距離を歩くことは困難な者が多いとされる。そのため，活動の場が自宅の近くにあることによって参加が容易となり，「参加のしやすさ」につながる。本研究においても，高齢者にとって活動の場が近いことが，活動参加への重要な条件として示された。

（３） 第３因子「地域貢献への主体的な取り組み」

岡本[7]は，他者・地域への貢献意識が高いことが社会参加活動の促進要因となっているとしている。また庄司ら[18]は，社会貢献意識，参加者の活動意欲（意欲的に取り組むか）が社会参加活動に影響を与えると指摘している。本研究においても，「地域貢献への主体的な取り組み」が示された。

これは，淞北台地区において，「地域住民との協力による地域のつながり」が強くなることによって，地域への帰属意識が促進され，他者への貢献意識が醸成されていることを示していると考えられる。地域の高齢化問題に対応する時に，社会参加活動が地域貢献として認識され，「積極的に地域活動を提案しよう」「閉じこもりやすいメンバーに声をかけよう」など自分なりに地域を守ろうという主体的な行動につながると推測できる。参加者が受動のままで，固定化した内容や限られているメンバーだけでは，活動自体が減退していくと考えられる。やりたいことを気軽に活動として提案できたり，閉じこもりやすいメンバーに声をかけようとしたりする地域の環境が，高齢者の主体的な態度形成につながり，社会参加活動の活性化を促進する重要な要素となると考えられる。

（４） 第４因子「満足感や自己効力感の獲得」

本調査の結果からは，社会参加活動の成果として，「親しい友人が増える」「自分は役に立っている」「自己成長が感じられる」「コミュニティの活性化に寄与している」，そして「関心のある活動に主体的に参加している」や「健康維持のための活動をしている」など，様々な側面で成果を感じていることが示されている。

「満足感や自己効力感の獲得」があるから，継続的な参加につながると考えられる。地域活動は，交流活動を通して自己の能力が認められ，喜んでもらえることで尊厳欲求が達成されるなど[19]，活動による満足感や自己効力感が参加を促進する要因となることが示唆されている。

本研究においても，先行研究を支持する結果が示されている。社会参加活動を通し，交流を重ね，さらに親しい友人が増えることが推察される。また，近隣住民と，気兼ねなくおしゃべりしながら，時間を楽しく過ごすことができ，健康維持にもつながる。そして，自分に関心のある活動に参加することで，活動自体の楽しみを感じるだけではなく，自分の強みを活かしながら自己成長も実感する場ともなる。さらにコミュニティの活性化に寄与・貢献できることなど，高齢者が自分なりの満足感や達成感を実感できることが，社会参加活動を促進する一要因であることが示されたと考える。

以上，高齢者の社会参加活動が活発な松江市淞北台地区の分析を通して，「地域住民との協力による地域とのつながり」と「地域活動への参加のしやすさ」は，高齢者の社会参加活動を促進する地域の環境的要因として示された。「地域住民との協力による地域とのつながり」は，地域社会の一員として地域への貢献活動に能動的に行動していくことにつながると推測できる一方，「地域活動への参加のしやすさ」は，直接に社会参加活動のハードルを下げ，社会参加活動を可能にする条件となる。

活動を通して相互の協力関係が良好となり，地域への帰属意識が促進され，「地域貢献への主体的な取り組み」が醸成される。これらは，社会参加活動を通し「満足感や自己効力感の獲得」をすることが，「地域の一員としての社会貢献」[12]を実践していく行動を促進し，社会参加活動の継続につながるという循環的な効果が生まれることを示された。

本研究の限界として，限定された地域を調査対象としたため，地域特性や回答者特性が影響していること，他の地域との比較分析が必要であることがあげられる。例えば，岡本[6]は，居住年数が５年未満と特に短い者が活動に至りにくいと指摘している。本研究の調査対象者は，居住年数10年以上の者が９割以上にものぼり，その大半が団地建設当初から転入してきた者である。また，松江市の大渇水を住民が一致団結して乗り越えてきた共同体験など，その何十年に培ってきた地域特有の関係性が社会参加活動に多く影響していると考える。このような地域特性に配慮しながら，今後本地域と異なる地域特性を有する地域における調査研究を行うことを期したい。

Ⅴ 結　　語

本研究では，高齢者の社会参加活動の活発な小地域において参加する当事者である高齢者の

社会参加活動と地域の環境的要因に対する認識から，高齢者の社会参加活動を促進する要因を明らかにした。小地域において高齢者の社会参加活動を促進するためには，高齢者個人のペースで参加できる環境整備を行った上，参加者同士の緩やかな関係性を尊重しながら，参加する当事者である高齢者の主体性を最大限に活かし，本人自ら認めた成果が実感できるようなプログラムの創出が求められると考える。

謝辞

本研究の実施にあたり，調査にご理解・協力いただきました島根県松江市淞北台地区の自治会の役員の皆様をはじめ，アンケート調査にご協力いただきました皆様に，この場をお借りして厚く御礼申し上げます。

文　献

1）橋本修二，青木利恵，玉腰暁子，他．高齢者における社会活動状況の指標の開発．日本公衆衛生雑誌　1997；44(10)：760-8.
2）佐藤秀紀，佐藤秀一，山下弘二，他．地域在宅高齢者の社会活動に関連する要因．厚生の指標　2001；48(11)：12-21.
3）金貞任，新開省二，熊谷修，他．地域中高年者の社会参加の現状とその関連要因－埼玉県鳩山町の調査から－．日本公衆衛生雑誌　2004；51(５)：322-34.
4）岡本秀明，岡田進一，白澤政和．高齢者の社会活動における非活動要因の分析－社会活動に対する参加意向に着目して－．社会福祉学　2006a；46(３)：48-61.
5）岡本秀明，岡田進一，白澤政和．大都市居住高齢者の社会活動に関連する要因　身体，心理，社会・環境的要因から．日本公衆衛生雑誌　2006b；53(７)：504-14.
6）岡本秀明．都市部在住高齢者の社会活動に関連する要因の検討－地域におけるつながりづくりと社会的孤立の予防に向けて－．社会福祉学　2012；53(３)：3-17.
7）岡本秀明．町内会・自治会活動，ボランティア活動，友人・近隣援助活動の関連要因とその主観的効果－地域福祉推進に関するインフォーマルな活動に関与する高齢者に着目して－．日本の地域福祉　2014；27(３)：55-67.
8）安田節之．大都市近郊の団地における高齢者の人間関係量と地域参加．老年社会科学　2007；28(４)：450-63.
9）パットナム，R.D著．柴内康文訳．孤独なボウリング－米国コミュニティの崩壊と再生．東京：柏書房，2006；52-71.
10）蘇暁娜．小地域における高齢者の社会参加活動への参加促進要因に関する研究－松江市淞北台地区のインフォーマルなグループ活動の世話役へのインタビュー調査を通して－．日本の地域福祉　2022；35：25-37.
11）総務省統計局．高齢者の人口（2020）．(https://www.stat.go.jp/data/topics/topi1261.html）2022.5.20.
12）平野美千代．日本の「高齢者の社会活動」：概念分析．日本保健科学学会誌　2011；14(３)：121-8.
13）高間由美子，杉原利治．高齢者の社会参加と生きがいに関する研究 高齢者の社会参加の現状と問題点．東海女子短期大学紀要　2003；29：35-44.
14）埴淵知哉，近藤克則，村田陽平，他．「健康な街」の条件－場所に着目した健康行動と社会関係資本の分析．行動計量学　2010；37(１)：53-67.
15）山崎正和．現象としての社交．松田陽三編．社交する人間－ホモ・ソシアビリス．東京：中央公論新社，2006；18-27.
16）久田邦明．コミュニティカフェへの期待．公評　2012；49(10)：20-7.
17）松岡裕子．後期高齢者のふれあい活動への参加経緯について－住民主体の介護予防を通して．訪問看護と介護　2004；9(８)：614-8.
18）庄司知恵子，佐藤嘉夫．高齢者の社会参加活動のあり方および参加促進に向けての考察－岩手県５市町村の調査より－．岩手県立大学社会福祉学部紀要　2015；17：27-33.
19）渡邉節子．高齢男性の老人のクラブなどの交流活動への継続参加を可能とする要因．癌と化学療法　2016；43：31-2.